



TITLE:

<学生の声>研究者として留学する ということ

AUTHOR(S):

久保田, 結子

CITATION:

久保田, 結子. <学生の声>研究者として留学するということ. Cue 2017, 37: 78-78

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/227446>

RIGHT:

学生の声

研究者として留学すること

工学研究科 電気工学専攻 大村研究室 博士後期課程2年 久保田 結 子

私は修士課程より京都大学のスーパーコンピュータを用いて地球近傍を取り巻く放射線帯電子の急激な変動について研究してきました。シミュレーション解析を行う中、本当の宇宙空間の状態を示す精査されたものでない『生データ』を見て自分の構築した仮想空間が本当に適切なのか確認したいという欲求が生まれました。そこで私は『京都大学大学院工学研究科馬詰彰奨学寄附金』の支援を賜り、放射線帯探索衛星 Van Allen Probes のプラズマ波動観測装置の主任研究者 Craig Kletzing 先生のいらっしゃるアメリカ・アイオワ大学 (University of Iowa) に4ヶ月間、海外研修を受けに参りました。

留学中は、初めて用いるデータ解析ソフトの使い方、仮想空間と違う『宇宙』の見方を教えて頂き、お昼を研究室のみなさんと食べに行ったり、ミーティングに参加させてもらったりと多くの人と英語で深く関わりを持つ機会に恵まれました。私はこれを、自由な学生という立場でなく一つの研究テーマを持った研究者として留学したからこそ得られた機会だったと思っています。

留学を考えていらっしゃる後輩の皆様には、どうか『英語を勉強する』以外の確固たる理由を持って海外に行ってほしいと思います。そうすればその理由がトピックとなり、共通の興味を持ったネイティブの学生や先生方と会話を交わすことができるからです。

最後にこのような貴重な機会をお与え下さった Craig Kletzing 先生、大村先生、馬詰彰奨学寄附金関係者の皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。

博士課程の魅力 —ひとりぼっちドクター撲滅を目指して—

情報学研究科 通信情報システム専攻 小野寺研究室 博士後期課程1年 塩 見 準

私の研究室では数年前まで博士課程の先輩が4,5人ほどいらしかったのだが、気づくと私が研究室で唯一の博士課程の学生（ひとりぼっちドクター）になってしまった。修士で就職する人と比べると、博士の人は3年も遅れて社会に出ることとなる。そのため進学には相当の覚悟が必要であり、進学を躊躇するのも当然だと思う。ぜひ博士仲間が増えたらなあと思うのだが、そのためには私が感じる博士課程の魅力についてこの場を借りて宣伝させていただこうと思う。私が思う博士課程の魅力は沢山あるが、そのうちの一部分を紹介する。

まず、私が思う最大の魅力は、研究活動の自由度の高さである。博士課程では、1) 自分が重要と思う（興味のある）社会問題を考え、2) 自分なりのアイデアを提案し、3) 問題を解決する、という一つの物語を自分の納得のいくように完成させる場が与えられる。特に2番のアイデアの出し方は完全に自由であり、既存の技術を上手く組み合わせて新しい技術を作り上げるのも自由だし、突拍子もない予想斜め上の技術を提案するのも自由である。自分が思いつくアイデアは、残念ながらたいていの場合使えないか車輪の再発明である。しかしめげずに考え続けているとごく希に、（程度は小さいかもしれないが）過去に誰も思いつかなかったアイデアを思いつくことがあり、その瞬間が個人的に進学して最も楽しいと思う瞬間である。

もう一つの魅力は、世界をリードする研究者と議論できる点である。博士課程に進むと卒業のために（国際）学会に参加し自身の研究内容を議論することが必須となる。学会には世界をリードする研究者が参加している。自分が日々まじめに考えた研究成果に関してその方々と議論し、フィードバックがいただけるということは非常に光栄なことであり、また同時に評価されることはうれしく思う瞬間である。

博士課程へ進むことは相当の勇気が必要であるが、一歩踏み込むと自由で充実した世界が広がっている。今後、日本全国でひとりぼっちドクターが撲滅され、博士課程の学生でわいわい賑わうことを願っている。